

# 癌と化学療法

## Japanese Journal of Cancer and Chemotherapy

Vol.42  
December 2015  
(12月)pp.2409-2508

No. **13**

特 集

チーム医療のなかでの漢方薬の果たす役割

総 説

発がんの主経路はDNA損傷を起源としない

Current Organ Topics

乳腺・内分泌腫瘍  
周産期の乳がんと生殖医療

## がんの漢方治療

—チーム医療のなかで果たす役割—

渡辺 賢治<sup>\*1,2</sup>

[Jpn J Cancer Chemother 42(13):2414-2417, December, 2015]

Kampo Therapy for Patients with Cancer—The Role of Kampo Medicine in Team Therapy: Kenji Watanabe (<sup>\*1</sup>Faculty of Environment and Information Study, and <sup>\*2</sup>School of Medicine, Keio University)

## Summary

This study details the role of Kampo medicine in cancer therapy. Cancer normally cannot be cured only with Kampo medicine. Therefore, Kampo should be administered in combination with surgery, chemotherapy, or radiotherapy. In that context, Kampo is useful in team therapy for patients with cancer. One of the characteristics of Kampo medicine is that Kampo diagnosis does not target the disease, but the patient with the disease. Kampo diagnosis is called "pattern diagnosis". Many patients with cancer are diagnosed with a "deficiency pattern", "cold pattern", "qi deficiency pattern", or "blood deficiency pattern". Based on these diagnoses, hochuekkito or juzentaihoto are often used for patients with cancer. Many other Kampo formulae can be used for patients with cancer diagnosed with the "qi deficiency pattern" and/or "blood deficiency pattern". Kampo is not only considered an herbal therapy, but also acupuncture/moxibustion and Yojo (nourishing life). To implement these Kampo modalities comprehensively, team therapy is essential. In order to treat a patient with cancer, rather than the cancer itself, Kampo can be used effectively. **Key words:** Kampo medicine, Team therapy, Pattern diagnosis, Whole medical system, **Corresponding author:** Kenji Watanabe, Faculty of Environment and Information Study, Keio University, 5322 Endo, Fujisawa, Kanagawa 252-0882, Japan

**要旨** がん治療における漢方の役割は多岐にわたる。しかしながら、残念ながら漢方だけでがんを治癒に導くことは不可能である。むしろ手術、化学療法、放射線療法などの治療とうまく組み合わせることで治療がうまくいくことが多い。その意味において、多領域の専門家が力を合わせてチーム医療を行うなかでこそ漢方の強みが発揮される。漢方治療の特徴は病気ではなく、病気をもつ人間の診断をすることにある。これを「証」という。がんの患者の「証」は「虚証」、「寒証」、「気虚証」、「血虚証」であることが多く、それに応じて補中益気湯、十全大補湯が用いられる。その他、気虚証、血虚証に対する漢方治療は多々あり、がん患者の支援を行う。さらに漢方治療は薬物療法、鍼灸治療、養生も含まれ、こうしたことを総合的に行うためにはチーム医療が欠かせない。がんという病気でなく、がんを有する1人の患者のためにも漢方治療の活用を望みたい。

## I. がん治療における漢方の役割

がん治療における漢方の役割は多岐にわたる。しかしながら、残念ながら漢方だけでがんを治癒に導くことは不可能である。むしろ手術、化学療法、放射線療法などの治療とうまく組み合わせることで、治療がうまくいくことが多い。その意味において、多領域の専門家が力を合わせてチーム医療を行うなかでこそ漢方の強みが発揮

される。

がんにおける漢方治療の役割は表1のようにまとめることができる。すなわち、①抗がん剤・放射線治療の副作用軽減、②術後の回復促進・イレウス予防、③化学予防、④再発・転移予防、⑤緩和ケアにおける愁訴の軽減である。このうち①、②については臨床的エビデンスが集積されつつある<sup>1)</sup>。③については小柴胡湯による慢性肝炎、肝硬変からの肝臓がん発症予防の研究があるが<sup>2)</sup>、

\*1 慶應義塾大学・環境情報学部

\*2 同 医学部

表1 がんにおける漢方治療の役割

1. 抗がん剤、放射線治療の副作用軽減
2. がん術後の回復促進・イレウス予防
3. 化学予防
4. 再発・転移予防
5. 緩和ケアにおける愁訴の軽減

表2 がん患者にみられる症状と漢方の証

1. 食欲不振・体重減少—虚証
2. 低体温—寒証
3. 体力低下・全身倦怠感・食欲不振—気虚
4. 皮膚の乾燥・脱毛—血虚
5. 気分の落ち込み—気うつ

その後、小柴胡湯が間質性肺炎を引き起こすことが判明し、むしろ肝硬変患者では禁忌となったことは極めて残念なことである。再発・転移予防は基礎研究では多くのデータがあるが<sup>3)</sup>、残念ながら臨床エビデンスとしては明確な結果は得られていない。緩和ケアにおける支援は日常診療ではよく経験することである。

このようにがん治療における漢方治療の役割は多岐にわたるが、患者の全身状態改善には漢方治療もあるということをおもいついていただければ、その目的にふさわしい漢方薬が見つかるはずである。

## II. 漢方の見方

漢方治療ではがんであるかどうかはあまり問わない。漢方では患者の状態を表現するのに「証」を重んじる。「証」とは病気と宿主である患者との反応を表す言葉である。がん患者の場合には、がんそのものおよびがん細胞から産生されるサイトカインによって宿主の状態が大きく影響される。

そうした患者の特徴を伝統医学的に表現するのが「証」である。WHOでは国際疾病分類の改訂を行っているが、ICD-11ではアジアの伝統医学が入る計画で現在公開されているベータ版にも掲載されている<sup>4)</sup>。

伝統医学の章は、1) 伝統医学の疾病、2) 伝統医学の証に二つに分かれている。伝統医学の証のなかに日本でよく用いる証が入っているが、中国・韓国は国で決めた証が整理されているが、わが国ではそれがなかったためWHO国際統計分類協力センターでは新たに作成し、それを土台に伝統医学の国際分類を作成した。図1に示すとおり、「虚実」、「寒熱」、「六病位」、「気血水」の四つに分けられるが<sup>5)</sup>、このうち「六病位」は急性熱性疾患の時に考慮すべき証であり、がんのように緩徐に進行する疾患の場合には「気血水」が重要視される。これらの解説は成書にゆだねるとして<sup>5)</sup>、がん患者で多くみられる漢

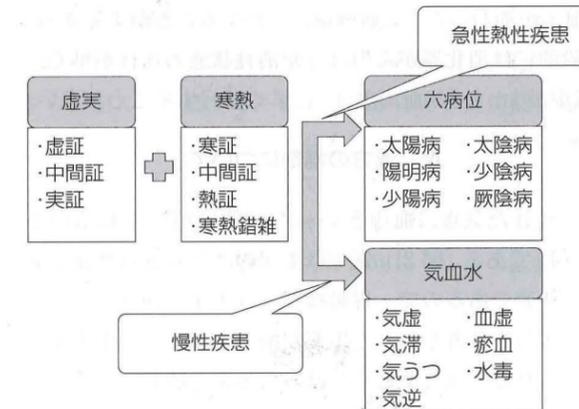


図1 漢方医学の証

方医学的証について解説する。

## III. がん患者の漢方医学的特徴 (表2)

がんの進行とともに、漢方医学的には特徴ある証になっていくことはよくある<sup>6)</sup>。まず、食欲が低下し、体重減少を起こす。こうした状態を「虚証」という。体重減少に伴い筋肉・脂肪の量が減少し、体が冷えやすくなる。こうした状態を「寒証」という。寒証の場合、患者が冷えの自覚をし、実際に低体温になる。低体温が免疫を落とすことはよく知られているが、体を冷やさない注意することが重要である。

食欲が低下し、倦怠感が強くなってくると「気虚証」となる。「気」の定義はなかなか難しいが英語では“vital energy”と訳されたりする。すなわち、生命維持の根源である。その「気」が絶対的に不足する病態が「気虚」である。気虚証の症状としては、元気がでない、気力がない、体がだるい、疲れやすい、食欲・意欲がない、日中の眠気(特に食後眠くなる)といった症状が出現する。食後の眠気に関しては、がんの進行とともに食後の副交感神経の活動が過剰になり、うとうとして起きてられないという状態になる。

さらにはがんの進行とともに、栄養状態の低下が随所に出現するようになる。こうした病態を漢方では「血虚証」という。血液は全身を循環しながら栄養分を運ぶのが「血」の働きであるが、この栄養を運ぶことが障害された病態が血虚である。症状として、外からわかるのは皮膚が乾燥してきて黒ずんでくる。爪が脆くなって、割れたり二重爪になる。実際に貧血になるのも血虚である。その他、毛髪が細くなり、白髪が増えたり脱毛も血虚症状である。概して病気が長引いた時にみられる病態である。がんや膠原病で進行した状態となり、全身の栄養状態が悪化した場合にみられる。

これらががんの進行とともに、「気虚証」からさらに「血

虚証」が加わった「気血両虚証」となることがよくある。一般的には消化器がんのほうが消耗状態の進行が早く、「気虚証」から「気血両虚証」に早く移行することが多い。

IV. 漢方の補剤について

こうした気虚、血虚といった病態に用いられるのが「補剤」である(図2)。気虚は上記のとおり胃腸機能が衰えた状態であるので、胃腸機能を改善する朝鮮人参、白朮、茯苓、黄耆といった生薬が配合されている漢方薬が用いられる。漢方薬としては、人参湯、四君子湯、六君子湯、小建中湯、それに補中益気湯(ほちゅうえつきとう)などである。

一方、血虚に対して用いられる漢方薬としては四物湯、芎帰膠艾湯などである。気虚、血虚のいわゆる「気血両虚証」に用いられる漢方薬が十全大補湯(じゅうぜんたいほう), 人参養榮湯である。大防風湯は関節リウマチなどの疼痛疾患に用いられる。このうち、がんで最もよく使用する漢方薬は補中益気湯と十全大補湯である(表3)。補中益気湯は「気虚証」の代表的な薬剤であり、その構成生薬をみると、人参・白朮・甘草・大棗・生姜といった四君子湯の成分が配合されている。四君子湯は気虚証に対する代表的な漢方薬である。一方、十全大補湯は人参・白朮・茯苓・甘草といった四君子湯の生薬と当帰・芍薬・川芎・地黄といった四物湯の成分が両方配合されている。四物湯は「血虚証」の代表的な漢方薬であり、気虚証、血虚証両方に対応できる「気血両虚証」の

薬であることがわかる。

補中益気湯、十全大補湯双方に共通の生薬のうち、人参・黄耆は補剤としての作用が強く、「参耆剤」などという呼び方をする場合もある。人参養榮湯は十全大補湯と非常に近い処方構成であるが、五味子と遠志が配合されるのが特徴的であり、五味子は呼吸機能を改善し遠志は中枢に働くため、十全大補湯の気血両虚証の症状に加えて、呼吸器・中枢の症状がある場合によく用いられる。

V. がんチーム医療としての漢方

漢方におけるがん治療は「がん」という病気を相手にしているわけではない。「がん」という病をもつ人間を相手にした場合、様々な症状に対し漢方治療が役立つことが多い(表4)。がん患者は、がんそのものによる種々の症状出現に加えて抗がん剤や放射線治療による影響を受

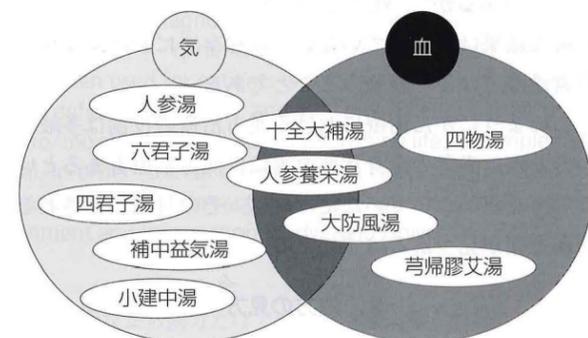


図2 補剤の種類

表3 補剤の生薬構成

	四君子湯	四物湯	その他
補中益気湯	人参・白朮・甘草・大棗・生姜	当帰	黄耆・陳皮
十全大補湯	人参・白朮・茯苓・甘草	当帰・芍薬・川芎・地黄	黄耆・桂枝
人参養榮湯	人参・白朮・茯苓・甘草	当帰・芍薬・地黄	黄耆・桂枝・陳皮

表4 がん患者によくみられる症状と漢方治療

症状	漢方治療
体重減少	十全大補湯, 補中益気湯, 人参養榮湯
食欲不振	四君子湯, 六君子湯, 人参湯
下痢	真武湯, 人参湯
便秘	大黄甘草湯, 潤腸湯, 麻子仁丸, 桂枝加芍薬大黄湯
冷え	四逆湯, 真武湯, 人参湯, 十全大補湯, 当帰四逆加呉茱萸生姜湯
疼痛	十全大補湯, 桂枝加朮附湯, 大防風湯, 真武湯
気分の落ち込み	香蘇散, 半夏厚朴湯, 抑肝散, 加味逍遥散
黄疸	茵蔯蒿湯, 茵蔯五苓散
嘔気	小半夏加茯苓湯, 人参湯
白血球減少	十全大補湯
末梢神経障害	牛車腎気丸, 桂枝加朮附湯
手足症候群	十全大補湯, 牛車腎気丸

け、様々な症状を呈する。こうした場合に、西洋医学的アプローチで足りない場合に漢方治療を考慮すべきである。漢方治療の場合には目的とする症状以外にも効果を上げる場合があり、一つの薬で複数の効果が期待できる。

がん患者の悩みを身近で聞く機会の多い看護師は、がんに付随する、もしくは一見関係ないようであっても、生活の質を低下させる症状を丁寧に聞いて医師に報告して欲しい。医師は西洋医学的アプローチとともに漢方治療を考慮し、試して欲しい。薬剤の効能および副作用については薬剤師の役割が重要である。さらに、「漢方」という言葉は漢方薬を用いた治療(狭義の漢方)だけでなく、「鍼灸治療」および生活指導を行う「養生」も含まれる。

疼痛緩和のためには「鍼灸」の活用も時には必要であり、鍼灸師の出番である。さらに「養生」は漢方的生活指導であるが、特に漢方では「医食同源」が強調されていて、日々の食事摂取は重要である。基本的にはがん患者では衰弱に伴い低体温に陥ることが多いので、体を温める食事が勧められる。食材そのものに五性(ごせい: 熱・温・平・涼・寒)があり、熱や温の食材を選ぶことももちろんであるが、調理法も加熱処理を加えて温めて食べることも重要である。こうした食事指導は栄養士の役割が欠かせない。

まとめ

がん治療の現場で、漢方治療の役割は多岐にわたる。

がん治療の補助療法としての漢方治療、抗がん治療の副作用軽減のための漢方治療など、その応用範囲は広い。さらにはがんに付随する、もしくはがんとは直接関係ないが患者の生活の質を低下させる症状に対し、比較的副作用を少なく対処することができる。さらには漢方の薬以外の治療法、すなわち鍼灸や養生といったものも含め、がん治療のチーム全体で漢方の活用についての認識を新たにしていきたいと思う。

文献

- 1) Kono T, Hata T, Morita S, et al: Goshajinkigan oxaliplatin neurotoxicity evaluation (GONE): a phase 2, multicenter, randomized, double-blind, placebo-controlled trial of goshajinkigan to prevent oxaliplatin-induced neuropathy. *Cancer Chemother Pharmacol* 72(6):1283-1290, 2013.
- 2) Oka H, Yamamoto S, Kuroki T, et al: Prospective study of chemoprevention of hepatocellular carcinoma with sho-saiko-to (TJ-9). *Cancer* 76(5):743-749, 1995.
- 3) Saiki I: A kampo medicine "juzen-taiho-to"—prevention of malignant progression and metastasis of tumor cells and the mechanism of action. *Biol Pharm Bull* 23(6):677-688, 2000.
- 4) World Health Organization: ICD-11 beta draft. <http://apps.who.int/classifications/icd11/browse/f/en> (Last accessed on September, 2015)
- 5) 渡辺賢治: マトリックスでわかる! 漢方薬使い分けの極意. 南江堂, 東京, 2013.
- 6) 渡辺賢治: 漢方医学. 講談社選書メチエ, 講談社, 東京, 2013.